

「祈るときには」（ルカによる福音書十一章一〜一三節）

1 主の祈り

ルカによる福音書を順番に続けて学んでいます。今日から一章です。いま読んでお分かりのように、「主の祈り」です。何度か私どもも取り上げています。何度取り上げられてもよいものです。

ルカを続けて順番に読んでいますので、前後関係が、否応なく気になります。その確認をまずしておきたいと思います。

一〇章の善いサマリア人の話、そこまで戻ります。律法学者の問いかけに答え、イエスは、全身全霊をもって神を愛することには、隣人を愛することもふくまれる、それを認めて、その上で隣人愛を実行すること、つまり、行うことを、質問者に求めたことを私どもは学んでいます。

それに続く、マルタとマリアの姉妹の話、そこでは一転して、聞くことを、御言葉に聞くことをイエスは求めています。妹マリアがそこでは模範でした。姉マルタの奉仕をイエスが軽んじたわけではありません。それは違います。しかしマルタも聞くことを優先し、そこから始めなければならぬのです。

イエスはそれに続いて今日の箇所で、祈ることを、教え、また求めています。行うこと、聞くこと、そして祈ること、どれが先でどれが後で、どれが大事で他はそうでもないというわけではありません。これらはすべて、主イエスに従う弟子たちに求められることです。

イエスがガリラヤを出て、メシアとしての強い確信をもち、都エルサレムに向かって歩み始めたことを私どもは知っています（九・五一〜）。そしてこのエルサレムへの旅は、イエスに付き従っていく弟子たち、ここではさし当たり十二人の弟子ですけれど、彼らの訓練の時でもあったのです。イエスの思いの中に、いま始まった神の宣教が、十字架の後も、ここにいる弟子たち、使徒たちによってになわれていく、そのようにして神の救いのご計画が実現されていく、それが強いご意志としてあったのです。

そのため弟子たちが、互いのあいだで、どのように一つの交わりをつくっていくのか、その中で一人一人がどのように信仰者として歩んで行くのか、それをイエスが心にかけていたことを、思わないわけにはいきません。そうした弟子たちの信仰と生活の中心には、まさに祈ることがなければなりません。主の祈りは、私どもが祈る祈りとして、主イエスが教えてくださった祈りなのです。

今日の箇所のはじめに、この祈りがどのようにして教えられることになったか、いきさつが記されています。

イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい・・・」

(一〜二節前半)。

祈りを教えてもらおうと、弟子(の一人)たちを動かした動機が、これらの言葉から分かります。一つはイエスの祈りの生活です。私どもはこれまで、幾度となく、イエスが、ときに弟子をともなって、人里を離れて、祈りの生活をしていたことを知っています。山で一人夜を徹して祈ったこともありましたが(六・一二)。それを見つけたことが動機の一つです。

もう一つは、バプテスマのヨハネが彼の弟子たちに祈りを教えていたことです。当時、ユダヤ教内の小グループ、宗派みたいなものでしょうけれど、それぞれに独自の祈りをもっていた。それがそれぞれのグループを特長づけていたということです。それを弟子たちも欲した。つまり、主の祈りには、彼らイエスの弟子たちを、他のグループから分ける、イエスの教えのエッセンスが込められていたということになるのではないのでしょうか。

そのような祈りは、「教えて」もらわなければならないものです。祈る心はだれにもある、だれもがもっている、それはむしろ否定しませんけれど、それだけではないのです。教えていただかなくてはならない祈りがあるのです。つまり人間として知らない祈りです。へりくだって、祈りを「学ぶ」ことの大切さも思うものです。主の祈りはまさにそうした祈りなのです。

2 父よ!

イエスは弟子の一人の願いに応えて、祈りを教えられます。主の祈りは私どもの祈るべき祈りだと申しましたけれど、そしてそれはその通りですが、しかしそれはまたイエスご自身が祈っていた祈りでもありました。

すぐお気づきのように、今日の箇所の主の祈りは、マタイによる福音書の山上の説教に伝えられているものより短く、簡潔なものです。そのため、このルカに伝えられているものが、元のものに近いと一般には考えられています。

今日は、一つ一つ、逐条、逐語的に説明することはいたしません。その代わり、最初の呼びかけの言葉を、少し詳しく見てみたいと思います。マタイとルカは、こうなっています。

天におられるわたしたちの父よ(マタイ六・九)。

父よ(ルカ一一・二)。

そして私どもの一般に唱える主の祈りは「天にまします我らの父よ」です。マタイと同じです。

ただ、ご存じのように、マタイの場合でも、元々の語順は、父から始まります。「父よ わたしたちの 天におられる」です。ですから、天におられるわたしたちの、は修飾語です。父よ! これが主の祈りの最初の言葉、呼びかけ、ある意味では、他のどんな宗教にも比べられない、キリスト教信仰の全部がこの中に入っているような呼びかけです。

主なる神を父よ、と呼ぶのは、旧約聖書に由来します（申命記三二・六、イザヤ六三・一六他）。イスラエルは神を父とするその子らです。

イエスも、そうしたイスラエルの伝統の中に生きていました。しかしイエスにおいて特別なことは、神が父であることが、父なる神への深い信頼の中で深められていったことです。神は、厳しい父であるだけでなく、慈しみ深い父としてとらえられています。ルカ一五章の有名なイエスの譬え、放蕩息子の譬えが暗示するような、神は、人が神を離れて、どんなに遠く行っても、帰りを待つ、悔い改める者を赦す父です。「アツバ」（父よ）という、イエスの肉声を保存している言葉には、慈父としての神への信頼が込められていました（二二・二九）。神を父として、私どもの父として啓示して下さったのは、御子イエスです。一〇章の次のような言葉を思い起こしたいと思います。

すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに、子がどういう者であるかを知る者はなく、父がどういう方であるかを知る者は、子と子が示そうと思う者のほかに、だれもいません（一〇・二二）。

神を父と呼ぶことのできるのはイスラエルの民だけです。私どもは契約の民ではないので、こう呼ぶ資格をもっていません。しかしイエスは「子が示そうと思う者」は神を父と呼びかけてよいと言っています。かくて私どもは、御子イエスによつて、父なる神との交わりに入ることが許されたのです。「主の祈り」の、父よ、という呼びかけは、それを語っています。パウロは、ローマの信徒への手紙で、神の霊によつて導かれている者はみな神の子であつて（八・一四―一五）、私どもも神をアツバ、わが父よ、と呼んでいいのだと言っています。

神は私の父であり、また私どもの父です。主の祈りは、私ども一人ひとりが唱えるときでも、むしろ神を父とする者の群れ、すなわち、われらの祈り、私ども神の民の祈りなのです。

3 聖霊という賜物

今日は、はじめに申し上げたように、主の祈りを逐条的に説明することはできません。いつかできることを願っています。

弟子の一人の求めに応じてイエスが、祈りを、主の祈りを示したとき、イエスは祈りのモデルだけを教えたものではありませんでした。主の祈りと共に、それに続いてイエスが語ったことにも耳を傾けなければなりません。

いくつかの譬えを交えながらイエスは、五節以下で、どのような思い、どのような信仰をもつて祈るかについて語っています。

少し分かりにくいところがあります。結論から申し上げれば、ここでイエスは、神を、父なる神を、祈りを聞き届けてくださる神、必ず聞いて下さる神として語っておられます。そしてそうした信仰と信頼をつくしてもつて祈り続けなさいと、ここで教えておられます。

最初の大きな譬え（五〜七節）は、真夜中、急な来客があつて、その日のパンはみな食べてしまつて、ない。そこで、隣の人に、彼は友人という設定ですが、頼みに行くわけです。ところが何だかんだと言つて断られてしまうという話です。この譬えは最初のイエスの語り始めの言葉に注意をすることが要諦です。「あなたがたのだれかに友達がいて」と始まります。イエスは弟子たちに問うています。あなたたち、だれでもいいけれども、急な来客で頼みに行くのが、あなたがたです、こんな目にあつたらどう思うか？ というのです。

聞いていた弟子たちは、心の中で、一斉に、それはない！ 困つてるとき断るなんてないよ！ というわけです。そう、当時の習慣からして、そんなことはあつてならない、ない、絶対がない、その例をイエスは引つ張つてきているのです。そしてそのように、あなたがたが本当に求めるなら、困つたときに、パン三つは、必要な分ですが、それを求めるなら、神は断ることはない、必ず助けてもらえる、それほど父なる神が願いを聞いてくれることは確かなのだ。問題は、あなたたちが、願い求めないことなのです。

求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる（九〜一〇節）。

与えられる、見つかる、開かれる、それは確かです。問題は求めないこと、探さないこと、門をたたかないことです。祈りとは求めることです。マタイの主の祈りの前置きのところには、神は、求めない先から、われわれに必要なものは知つておられるというイエスの言葉があります（六・七）。それは私どもが祈らなくていい、求めなくていい理由にはなりません。むしろ、マルコにあるように、「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じて」（一一・二四）求めることです。それが私どもの祈りの確かさです。

必ず与えられる、見つかる、開かれることを、イエスはもう一つの譬えをもつて明らかにしています。譬えとして使われているのは、地上の人間の父です。たとえ悪い親でも、親であるかぎり、父である限り、取るであろう、するであろうことです。いまだき、まさにそうであつてほしいと、逆に思わざるをえませんが、いずれにせよ人間の父が譬えとして用いられます。

あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる（一二節）。

父は、人間の父でも、子供に「良い物」を与えます。それなら神が神の子らに良い物として与えて下さるのは何でしょうか。それは「聖霊」だと明言されています。聖霊は私どもの霊と共にあつて、私どもを教え導き、執り成す神です。霊において神が私どもに伴つて下さること、私どもにとってこれ以上の約束、これ以上の良い物はないのです。

（一一・一四）